

TOPICS  
1

# 第9回セーフティジャパンインストラクター競技大会 世界トップクラスのインストラクターが 安全運転の技を競う



開会式で挨拶を行う土橋哲・本田技研工業(株)専務取締役・安全運転普及本部本部長

「第9回セーフティジャパンインストラクター競技大会」が9月1日～3日の3日間、鈴鹿サーキット交通教育センターで開かれた。この競技大会はHondaの安全運転普及活動の要である安全運転インストラクターの指導力ならびに運転技術の向上と均質化を図り、活動の質を高めることを目的に1997年より毎年開催されている。

今年には国内から93名、海外からインドネシア、オーストラリア、韓国、シンガポール、タイ、中国、トルコ、パキスタン、フランス、ベトナム、マレーシアの計11カ国29名、総勢122名が参加した。

選手はグループA(国内交通教育センター)グループB(Honda製作所、研究所、ホンダ学園、ホンダエンジニアリング)グループC(二輪ディスト、スポーツライディングスクールインストラクター、ライディングアドバイザー)グループD(四輪販売会社セーフティコーディネーター)グループE(海外各交通教育センター他)に分かれ、安全運転の技を競った。

## お客様に『質』の高い指導とアドバイスを行うために

大会1日目はグループAのインストラクターを対象にした「指導力審査」が行われた(下記コラム参照)。

グループA～Eまでのすべての選手による二輪、四輪の競技が始まる大会2日目。午前8時30分から行われた開会式では、大会会長である土橋哲・本田技研工業(株)専務取締役・安全運転普及本部本部長が次のように挨拶した。「お客様の安全を守るという高い『志』を持ち、指導者としてふさわしい『技』を磨き、『質』の高い指導やアドバイスができるよう、日々自分を高めていただくことを期待します」。

9時30分より  
二輪部門は「ブレーキング」「パイロンスラローム」「コーススラローム」



二輪部門「ブレーキング」



今大会は海外11カ国29名の選手を含む総勢122名が参加

四輪部門は「フィギア&縦列駐車・車庫入れ」「ブレーキング」「パイロンスラローム」と競技が行われた。

2日目の最後には、1日目の「指導力審査」で第1位となった交通教育センターレインボー浜名湖のインストラクター3名が二輪車の運転姿勢の指導方法についてデモンストレーションを行った。インストラクターの説明方法や受講生とのコミュニケーションのとり方は二輪部門、四輪部門を問わず全選手の関心を集めた。



二輪車の運転姿勢の指導のデモンストレーション

## 年々向上する 参加選手の競技レベル

大会3日目は午前8時より、二輪部門の「一本橋」、四輪部門の「コーススラローム」が行われた。最終競技はグループAの選手による「トライアル」。地震など災害時における二輪車の支援活動をテーマに、コースには瓦礫に見立てられた障害物が設けられている。これらの難関に選手は挑んだ。

午後には各部門の表彰式と閉会式が行われた。運営委員長である河野光彦・本田技研工業(株)安全運転普及本部事務局長が「選手の皆様の競技レベルは年々向上していると実感しました。今後も、運転技術と指導方法に関する研究と創意工夫を継続していただきたい」と選手たちを激励し、大会は幕を閉じた。



写真上/二輪部門「パイロンスラローム」  
写真下/二輪部門「一本橋」



二輪部門「コーススラローム」

二輪部門「トライアル」



四輪部門「パイロンスラローム」

四輪部門「フィギア」



四輪部門「縦列駐車」



四輪部門「ブレーキング」



四輪部門「コーススラローム」



## 指導力審査 今回のテーマ:二輪車の運転姿勢の指導方法

今年の指導力審査のテーマは、「二輪車の運転姿勢の指導方法」。Hondaモーターサイクリスト・スクールの中級コースに参加するお客様が対象という設定で、7つの交通教育センターのインストラクター3名1組が規定の15分間でわかりやすい指導方法を競った。発表された事例のいくつかを紹介する。

### 交通教育センターレインボー和光

停止状態のバイクにインストラクターが乗車し、急加速した時と急ブレーキをかけた時のライダーの姿勢の変化を40km/hと80km/hのケースで再現。スポーツバイクの場合は急な加速・減速に対応するためにはニーグリップが必要であることを説明。さらに、正しいニーグリップを行うために足のつま先を外側に向けて、前方に



向けてほしいとアドバイスした。また、ニーグリップができないスクーターでの運転姿勢についても解説した。

### 交通教育センターレインボー埼玉

最初に、ライダーの「目・肩・腕・手・腰・ひざ・足」7つのポイントの正しい姿勢について解説。これをふまえた上で、走行中は自分の頭が一定の位置になるようにバイクの動きに対して、自分の身体を合わせることを説いた。また、しっかりと前方の情報を収集することを意識して運転することが大切であると付け加えた。



### 交通教育センターレインボー浜名湖

加速・減速時、ライダーにどのような力がはたらいているのか、パイロンを利用して示した。止まっているバイ

クの後部座席にパイロンを乗せ、インストラクターがバイクを押して加速状態を再現すると、パイロンは後ろへ倒れる。逆に、減速状態ではパイロンは前に倒れる。そして、腰、足、ひざなど下半身に力を入れると、上半身がリラックスできるとアドバイス。加速・減速時に発生する力に対しては、このリラックスした上半身をうまく使うことがポイントであると説明した。



最後に、審判長である新家哲男・鈴鹿サーキット交通教育センター課長から「『それは、わかっている』と思っ